

戦場

生と死の狭間

この戦場の地獄の真実

Y・Kさん 66歳

摂津市三島

私は昭和十五年一月より、現役兵として現地入営し、六年三カ月中国各地を転戦して終戦後、復員した。以来四十年を経たがその間戦争について、家にあつても外においてもあまり語ろうとはしなかった。それは軍隊という特殊な組織形態の中で、有形無形の批判や拒否の許されない絶対的な至上命令は、民主主義という新しい思想の転換の中で、どれ程理解されるものか、また興味本位に受け取られ、その真実をどこまで解ってもらえるのかと疑問があつたからだ。そして語ることが、戦死した戦友を思うとき、ともすれば自慢話に受け取られるのを恐れるのだ。そうした貝のように閉ざした口も、戦友会るときは胸のつかえを一気に吐き

出すように、時を忘れ話し合うのを楽しみにしている。

戦後、部隊史、戦記記録等が多く刊行されているが、戦場の死闘についてその真実をハッキリと記したものは数少ないと思う。終戦以来、時折聞いたことは、戦争中、日本の兵隊は中国で悪いことをしてきたということだ。また、ある私の知人もそうした質問を私にしてきた。私はこのままでは兵隊は悪者扱いにされてしまう、特に戦死した戦友は何も言えずに汚名を着せられては浮かばれない。生き残った我々はそのためにも、その不信と危惧を正さねばと思っている。

戦場という苛酷な状態はそれを体験したものではなければ理解は難しいものだ。戦場において彼我の対立は、生と死の選択である。生きるか、死ぬか、やるか、やられるか、生への執着は、

勝つか負けるかにつながる。生きとし生けるものの本能でもある。

そうした死闘の極限状態の中では、正とか悪などとかは存在しない。我も敵もすでに人間性を失った状態だ。相手をやらなければ、こちらがやられる。この地獄の中に正や悪などは存在しない。一コ分隊（十四、五名）である停車場の歩哨勤務についたある晩、二つ先（約六キロ）の歩哨が敵のゲリラ部隊の襲撃をうけて全滅した。軍に協力していた筈の中国人がその夜の警備状況を敵に密告していたのだ。四六時中、次は我が歩哨かと毎日緊張の連続で神経は休まることはなかった。鉄道の爆破はその合間に行われた。自分のいる足もとが敵地であつた。敵地であれば我々以外は皆、敵に見えてくる。戦闘員、非戦闘員の見分けはつく筈もない。十二、三歳の子供でも時には衣服の下に柄付手榴弾二、三発を持っている。

女、老人とはいえ一応は疑いがつった。

中国の江蘇省、浙江省は大小の運河（クリーク）が縦横に走り、桑畑や田畑が多く、日本軍の作戦は展開がでずに中央突破作戦となった。後退出来ない敵は、船の舳先が波をかき分けるように左右の地域へ逃げてゲリラ部隊となって潜行する。農民や民間人になって、我々の前を通りすぎても分からない。そうしたゲリラの動きを察して討伐行に出る。我々も中国服、中国靴で敵の中へ潜入する。敵と遭遇して戦闘は激しくなる。我方に戦死者が出る。戦友のかたきと神経は頂点に達する。（敵は日本の作戦をよく知っている。当時の中国軍指揮官は、日本の陸軍士官学校の出身者が多い。蒋介石も新潟の高田連隊で一時教育をうけている）民家に人影を見れば、その民家を焼き払う。そこに非戦闘員などの見分け

られる筈がない。敵もまた同じくやられたらやり返す、互いに復讐の連続である。

あの作戦の途中、浙江省の紹興の街に入った。ここは老酒で有名な紹興酒の産地である。一軒の造り酒屋に入っただが、人影はない。高さ五、六十糎位の瓶に紹興酒を詰めて五、六段程重ねて積んである。それを見た途端、この作戦で戦死した戦友を思い出し、その悔しさと明日は我が身かと、生の保証のない感情がつのって自制心を失った。銃などで瓶をつぎつぎと叩き割る。いつせいに瓶は崩れて土間は酒びたしである。我に返ったとき飲める酒は一滴もなく、勿体ないと顔を見合せる。

昭和十七年五月十四日浙贛（せつかん）作戦が開始された（作戦原因省略）。その参加兵力、歩兵八十五個大隊、野砲旅団、鉄道連隊（関東軍より）爆撃航空隊等、空前の大兵力が動員された。作戦完了

の二ヵ月間は雨期（中国では黄梅天）と重なり雨がなかったのは九日間である。敵は第三戦区顧祝同軍三十個師団約二十五万。その膨大な大兵力もさることながら、もつとも困難を極めたのは、雨と股ずれと水虫と食糧の欠乏だ。連日の雨で田畑も道も川も泥水となり、腰までつかりながらの行軍であった。水虫に侵された足の裏のかゆさに気が狂わんばかりにかきむしり、ただれてその痛さは言葉に言いあらわせない。その疲労した身に食糧の欠乏が追い打ちをかける。後送される筈の食糧、弾薬は到底追いつかない。退却した敵は我が軍の背後に回り、無装備の輸送隊を攻撃する。大半はやられて食糧は全く途絶えた。晴れ間を見て食糧の徴発命令が出た。

徴発とは物資を半強制的に買い上げることだ。それも先に物資を蒐集して、後続の經理班が村民に金を渡す。蒐集

した物資に相当した金額が支払いされたものかどうかは前進する我々にわからない。掠奪にもひどい状態である。

まして当時中国の紙幣は種々雑多で、

A省の紙幣はB省では通用しない。

B省のはC省では駄目である。一軒の農家に入った。瓶の中に五合ばかりの米がある。その米を取ろうとしたとき、一人の七十歳位の老婆が出てきて手を合せてその米を取らないでくれと哀願する。逃げおくれたと言うよりてん足で逃げられなかったのだろう。無理に持ち去ろうとすると私の足にしがみついてなおも哀願する。とうとう何も取らずに引き場げたのである。飢えと言うこと、生きると言うことを常に死と背中合わせを幾度となく体験し、四十年を経たいま、六年三カ月は酷い歲月であったと悔悟している。しかしこれが悪と言われれば黙っておれないのです。

当時我々は国民の期待を担い、歎呼の聲に送られて戦地へ渡った。敗戦となつて復員すると一変して我々の行為は非難された。一步ゆずつてそれを悪というならば、国政に参画した国会、府市町村の議員、報道関係、公務員、教員、作詩作曲家、出征兵士の見送りと輸送関係者等、国民総てが何らかの形で、^{ほうじょ}幫助者になつていゝのではないだろうか。戦場のこの地獄の有様を適切な判断で理解され、偏見もなく記述された記録、刊行物は少ないように思う。善必ずしも善にあらず。悪必ずしも悪にあらず。と言うがどこからが善で、どこからが悪か、この地獄の戦場でその線引きのでき得る者は果たしているだろうか。こうした戦場の残酷な行為を弁解するものでもなく、理解してほしいと乞うものでもない。それは読む人のご判断におまかせする。正確な判断は後世の史実家がしてくれるだろう。

とにかく戦死した戦友を思うとき、このまま悪の烙印をおされては、あまりにも可愛想でもあり、生き残つた我々のつとめと思い、貝のように閉ざした口を今こそ開いて、その真実を言おうではないかと、三年程前から戦友会で訴えてきている。我々はもう六十年代半ばを過ぎた。戦場の狂気性、おろかさ、むなしさを背負つて、戦友が次々と倒れていった。国民をこの苦界に再び立たせてはならないことを願うものである。

サイパン島での戦闘体験

T・Hさん 63歳

摂津市鳥飼野々

私は、昭和十九年七月七日玉砕した中部太平洋方面艦隊司令長官、南雲忠一中将を最高司令官として戦った、マリアナ群島、サイパン島の戦闘においての私の体験を「凝縮」して、将来の日本を背負ってゆく「若き青少年」の心に、戦争は人類にとって罪惡非道であることを認識し訴えろと共に、戦争を体験した人も体験しなかった人も、「現在ある日本の平和の重み」を深く噛みしめて欲しい。そして世界人類の恒久平和を願って……。

サイパン、テナン島は日本の遙か南二千余キロの太平洋に浮かぶ小島で、飲料水の乏しい島であるが、当時米軍の「戦略爆撃」から日本を防衛するためには、「絶対確保」しなければなら

ない要衝であった。昭和十九年六月十一日、七月七日の玉砕で、このサイパン島が米軍の手に陥ちて、日本本土が米軍の「航空戦略」により、B 29 (Boeing・B-29) の爆撃によって日本本土が文字通り廢墟と化し、広島、長崎に原子爆弾が落とされて、敗戦へと繋がっていった歴史は、日本人の誰しもが記憶に残っている事実である。

当時の日本人として……。サイパン、テナン島は、サイパン水道を隔ててすぐ目の前に見える島々だ。この小さな絶海の孤島に、怒濤の如く押し寄せた米軍を主力にした（アメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダ）連合艦隊の、航空母艦十五隻、戦艦、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦・その他、大小艦艇・輸送船等、実に「八百隻」におよぶ大機動力を駆使し、ありとあらゆる膨大な物量にものをいわせて、制海権・制空権を掌握し、その兵力十

数万。それに対して守備する日本軍は、陸海軍合わせて僅か四万五千余。航空兵力もなく、乏しい武器で強大激烈な米陸海空三軍の猛攻に対し、我が守備兵はよく勇戦敢闘したが、僅か一ヵ月足らずで玉砕した。

その戦闘を一口にたとえて言えば、祖国を主人とする一匹の忠犬が、百匹の猛虎と、主人を護るために死力を尽して、血み泥の闘いの末に斃れてしまう状況であった。

米戦艦の四十五センチ砲は、昼夜を分かたず約一ヵ月、四方八方からまるで大きなドラム缶の雨を降らせるように、砲弾を撃ち込んで来る。重量一トン余もある砲弾の轟く音と炸裂する様は、「烈雷と激震」が同時に襲ってきたようで、全島が轟音と地響きに揺さぶられた。我が守備兵は怒濤の如く押し寄せる敵の大軍の上陸に本来、空を撃つための高射砲を上陸軍に対し、

“水平射撃”せざるを得ぬ有様であつた。

一発撃てば百発撃ち込まれて部隊は全滅する。六月十五日から十七日の二度にわたる必死の夜襲で、米軍に甚大な被害を与えるも、我が陸海軍の主力は米軍の反撃に全滅の悲運を辿り、なおも決死の反撃を繰り返しながら、

“七月七日”早暁午前四時を期し、サイパン北部のマタンシヤの浜辺、丘陵からタナバクの米軍砲兵陣地に向かつて、最期の総攻撃を執行してタナバクに布陣する米軍砲兵陣地を蹂躪。米軍砲兵大隊二個大隊を全滅させ、敵の屍を踏み越えて、敵陣奥深く遮二無二突込むこと、数時間余りで桜花の散る如く全員玉砕した。

食べる物とてなく水もなく、幼ない児を抱えた婦女子や老人達の群れは、戦火に巻き込まれて傷ましく爆死する者、負傷する者、飢餓に苦しみながら

戦火を遁れて島の北端のマツピ岬に辿り着いたものの、先は海でもう遁れる場所もなく、死に魅惑されたように、米軍の迫る中を、幾百幾千と数えきれぬ民間人老若婦女子や、幼児、乳飲み児と共に投身自殺を企て、南海の絶壁の海に身を躍らせて消えてゆく。負傷して動けぬ兵は“自殺”して自らの命を絶つ。あとに残った人びとも絶望の淵に追いやられつぎつぎと自決したり、「兵隊さん！！私とこの子を一緒に殺して！！」と、泣き叫び歎願する幼子を抱えた婦女子の姿。マツピ山の崖から飛び降りて樹木に引掛かったままの親子（胎児）の死体。見る者をしてこの世の阿鼻叫喚地獄さながらの姿を露呈していた。

七月七日夜半のこと、マツピ岬に残った海軍の司令部から一将校の命令により、「動ける者は全員ガラパンに集結せよ！！ガラパン、タッポーチョに残存

せる友軍と合流して、再度にわたる最期の総攻撃を執行せよ！！」時すでに遅く、私達が残るマツピ岬は、米軍の袋の鼠となり完全に包囲されていた。後ろは絶壁の海。進むも死、退くも死、ただ死あるのみ。今は中部太平洋方面艦隊司令長官南雲忠一中将閣下（緒戦にハワイ真珠湾攻撃の司令官）は自決され、残った私達、軍人軍属は、銃口火を吹く敵陣の中間を突破して、「敵中縦断潜行のガラパン集結行」が始まった。すでに全島米軍に制圧された中での行動で、野を越え、山を越え、谷を渡り、浜辺を行き、丘陵を登る。途中にある地獄谷。

七月七日早暁の玉砕最期の総攻撃に、参加出来なかった数多くの負傷兵の屍が散乱し、司令部のあった地獄谷には、陸海軍の閣下達が自決された洞窟があり、私達の行く先々は死臭の匂いが鼻について漂い離れない。“雨期”が来

て一息ついて何気なしに眺むれば、汗と泥に塗れた軍服を着た兵士の屍は、熱帯の酷暑の中で腐爛して蛆が蠢き、無数のハエが全身を覆う。泥土に頭を垂れ雨にうたれた兵士（英霊）の上に流れ落ちる泥水は、眺める私の心にこの世の諸行無常の感を深めさせた。雨に打たれ、要所要所に、網の目の如く陣地を張り巡らす敵米軍の中を行く私達は、不意をついて闇夜の中に真赤に焼けて走る銃弾、砲撃に身を晒し、たびたびの掃討戦に遭遇し、つぎつぎと倒れゆく戦友を断腸の思いと慟哭の中で残して、なおも行動する。闇夜に屍を踏み越え、屍と共に寝み、目的に向かって行動する私も、飢えに苦しみ、傷の痛手に苦しみ、足を引き摺り、背に血だらけの戦友を背負い、真赤な鮮血は私の軀を洗う。

敗戦の惨さを心に感じつつ、全魂を傾けて、極限の中に生きる人間の、私

の行動を支えてくれたものは、「大義の道に生きる」という信念と、目的感に生きる執念であった。再度にわたる最期の総攻撃。「ガラパンに集結せよ!!」その命令が、私の氣力を持続させてくれたのである。私はマツピ岬を突破する直前の時間、生死について随分、煩悶懊悩した。天皇陛下のため？祖国日本のため？親兄弟親族のため？「自問自答」しながら「大義の道に生きる」この言葉が「生死」について、煩悶懊悩する私の心を、少しでも和らげてくれたのである。人間誰しも死を目前にして「平氣」な者はいない。ただ、目的があるから、死に場所は華を咲かせたいのが人情であり「大義の道に生きる」即ち「上官の命令」に従って行動する、ただそれだけが「極限の中に生きる」人間の「生き甲斐」にはかならないと、私なりに感じただけで、大胆な行動もできただけである。最後

は、目的地ガラパンに到達したが、そこにはすでに組織ある軍人の姿はなく、ゲリラ化した友軍が少人数で個々にとどまり、内地の援軍を待ち続ける軍人達の姿があっただけである。

「目的感」を失った人間は今までの氣力が崩れて、ドット押し寄せる衰弱した軀と、負傷や病が全身を覆い、精魂尽きて異国の山野の草葉の蔭に倒れて終う。私は米軍に救助され米軍の野戦病舎に運ばれて、アメリカ本国を経て文字通り九死に一生を得て、昭和二十一年十月三十日、夢にも思わなかった、祖国日本に復員して来たのです。戦争ほど、人類にとって「罪惡」なものはない。この悲劇は将来の日本を、背負ってゆかねばならない青少年の純真な心に訴えたい。そして戦争のない平和な日本。世界人類の恒久平和を、青少年の力で築いて欲しい。

私の経路

Saipan→Hawaii→San Francisco
→Camp.Maccoy Wisconsin→
Bitters field→Los Angeles→Scofield
in Hawaii→Uraga
Kanagawaken in Japan→
Go home Osaka (1946)
Forty Years ago (1944～1946)
I was in United States of
America Prisoner of War.

戦艦大和

S・Rさん 62歳

摂津市学園町

乗艦

昭18・7・27

一、戦艦大和の一等兵

三千五百の乗組員

出撃ラッパ鳴り響く

登舷札に帽振って

柱島をば遠ざかる

臉に浮かぶ父母の顔

南方基地

昭18・8・13
昭19・1・10

二、前線基地のトラック島

椰子の緑に珊瑚礁

夏島 秋島 楓島

青いドレスの娘子は

長い黒髪 黒い肌

そぞろ歩きも皆はだし

魚雷被弾

昭18・12・24

三、輸送任務で横須賀へ

東北なまりの陸軍兵

三千人の輸送船

赤道直下にさしかゝる

闇をつんざく轟音は

魚雷を受けて大さわぎ

マリアナ沖海戦

昭19・6・16

四、(ポルネオ)タウイタウイと(ニユーギニア)バチヤン島

突如と下る命令に

マリアナ沖にばくしん轟進し

ゼットZ旗揚げ血は燃える

されど敵艦影もなし

中将湾にたどり着く

フィリピン沖海戦

昭19・10・23

五、風雲けわしフィリピン

副砲一発火を噴けば

雲間に消えた砲弾は

初弾命中の勝鬨カチトキを

撃破空母が傾むきて

泳ぐ敵兵目のあたり

レイテ沖海戦

昭19・11・8

六、ブルネー湾を後にして

機動艦隊勢揃い

隊列組んでレイテ沖

敵グラマンの迎撃に

旗鑑アタゴ愛宕は火を噴きぬ

三日二夜の海空戦

水葬

昭 19
・ 11
・ 12

七、艦は大破で兵もまた

戦艦武蔵^{ムサシ}は既になく

戦陣なかばで引返す

黄昏^{タシガラ}せまる南海に

散り逝く戦友^{トモ}の水葬は

四十余名の名を告げぬ

大和の最後

昭 20
・ 4
・ 7

八、片道燃料の死出の旅

最後の決戦沖縄へ

敵機の猛襲数百機

血に染められた上甲板

鑑諸共に沈みゆく

三千余名が花と散る

沖縄戦線に想う

K・Kさん 62歳

摂津市庄屋

太平洋戦もたけなわに、主人を戦地に送り実家にて肉親の世話を見ながら沖縄戦線を迎えた。昭和十九年九月、海鳴りのように聞こえる爆音に望遠鏡を覗く友軍。渡り鳥のように黒く群がる飛行機。敵機来襲の声に静かな山村も大騒ぎ。腰を抜かした私は取るものも取らずわが家へ。気は焦れど足がすくみ、やっと家に着き祖母と子供を防空壕へ。その時すでに伊江島の飛行隊では、高射砲や爆撃の音。B 29と言う飛行機の恐しさ。沖縄全島の空は黒煙ばかり。その時の爆撃機は何百機という。爆撃砲の炸裂ばかりが一日中続く。

一日が過ぎて、翌日哀れ渡久地港とぐちみなとには軍用艦のまつ二つに裂けた残骸が荒

波に洗われている。ともに防空壕や蛸壺たこづぼを掘りし兵士も艦とともに沈んで終わった。目ぼしい建物は、みんな爆破され一日で姿が変わった。まだ夢もさめやらぬ翌年の三月頃より始まった空襲は、本格的に毎日となり、艦砲や空襲が昼夜とつづき、やがて上陸となった。防空壕も数掘った私は一番丈夫な丸木造の横穴壕に入った。義姉親子四人と十名。その日の空襲は一番はげしく、百軒位の山村の小さな用水池をグラマン機八機編隊で爆撃している。頭上を低空旋回する爆音の恐しさ。入口を布団で防ぎ空襲の止むのを待つ。翌日弁当を造り今度はジャングルの中の壕へ行くが、山裾でわいわいと訳もわからぬ声に耳をすますと米兵であった。

そら大変と各自がバラバラとワラビの中へ息をひそめて耳をすますと、シャンシャンと、得体の知らない車が

行列をなし、ブルドーザーを先頭にトラックに満載の兵。後から砲身を載せた戦車。大空襲に二十五キロ爆弾で大きな池と化した所や障害物を置いた道もなんのその。先頭のブルドーザーでわけもなく切り拓いてくる。

三日目にまたジャングルの壕へ。朝から頭上を越える砲音は次第に近づいて来た。今泊いまどまりの海より次第に山間に攻めて来た。壕入口にいた私は思わずやられたと思った、がそれは大きな土の塊が肩を打ったのである。音もだんだんと遠くなり、出て見れば昼間でも暗いジャングルは枯木の山。ただ、ア然とするだけ。皆一日の無事を喜んだが、向かいの壕では父が爆風で息が切れたと泣く。二百米位離れた壕でも二十五人の死者。砲弾は伊豆味村いずみからの迫撃砲だったとのことだった。それから皆が一カ所に集まり、ジープで来た米

兵に老人や子供は手を挙げた。若い男は弁当持ちで逃げまどう。

私達は砲弾でバラスに化した小石を踏みながら岩山の洞くつへ。そこより見える海は大小入りみだれた戦艦が地平線の彼方までつづいていた。その上を友軍機が一機ずつ急降下して体当たり。火柱は高く上がるがすぐ消える。また特攻隊の一兵士が戦死。友軍の飛行機はどうしたのやら。その頃から追われた友軍が夜襲を繰り返していた。私達は捕虜になり、生死をさ迷う祖母八十三歳と生別れ、胸も切裂かれるような思いを残し、着いた所は金武村の辺之久。テント一枚を渡され、草を刈ってござにする。そこは友軍の死屍が散乱し、またマラリヤの発生にあった。栄養失調の人々はみるみる倒れ、だんだん畑もアレヨアレヨと言う間に。墓場にベトナム難民と寸分もちがわぬ捕虜三万だという。私達は、そこにいて

は死を待つのも同じと夜を通して羽地村へと。持てるだけの荷物を持ち東村のジャングルにさしかかると、哀れ戦いに疲れた友軍が道で食べ物をねだっている。

夫や兄も敵地でどうしているのかと思うと胸が詰まりそう。哀れな姿はペンでは書きとれない。避難用の食糧やマツチを友軍に与えて山を登り、休む間もなく山をかけ下りる。八時には米兵が行動を起こすので、見つければ女性はまだでは済まされない。羽地には米軍が駐留している。義兄の所へ着く時は食糧も三分の一くらいになり、私達母子も疲れ果てていた。とくに子供達は栄養失調で歩行もできない。蛙や田うなぎを栄養源とした。

七月頃には自分達の村に帰るが、残った祖母は三日後に亡くなり、かくれていた義兄が葬ってくれた。それから文字にしては表わせない苦労がつづく。

二十四年七月夫戦死との公報が届く。病弱な両親に子供をかかえ、途方に暮れる。二十四年八月頃、風の便りで大阪に兄弟が元氣と聞き、嫌がる父母を説得して、一年がかりで大阪永住のビザを取る。上阪前に羽地の義兄が摩文仁の戦跡に連れてくれる。姫百合の壕は縄梯子。健児の壕も鉄兜や水筒がころがり、砲弾で打ち砕かれた石コ口を踏みながら、「この川は僕が五〇米くらい突破するのに一時間以上もかかり、やっと水を飲んで帰った」と義兄が言った。

夜が明けると手と口は血だらけ。呑んだ水は友軍の血の川だったと言う。ガラガラ石を踏み、枯木をつかみ上に登る。前も横も鉄兜や水筒、軍靴が転がっている。息子の手を取りながら気も許せない。やっと摩文仁の丘に登った。大きな戸板がある。四隅を大きな石で押えられて、そこは手島中将と長

勇参謀長の自決された場所だとのこと。
私はただ悔しさに胸が込み上げて言葉
に出ない。

一礼をしてから海の水平線を眺めな
がら幾万の人びとが波に呑まれたこと
を思い、登った反対に山を下り始めた
が、四、五年も生えつづけたススキは、
私達より高く、前に行く人の姿が見え
ず、草の動きで前に付いて行くという
有様。やつと麓に下りたが荒芒たる平
野には車輪の跡が長く長くつづいていた。

今は観光地として立派に整地され、
数多くの碑が立っているが、二十六年
頃は本当に荒地でただ英霊は泣きなが
ら眠っているようであった。義兄は傷
を負い海に飛び込み浮き沈みしていると
ころを、米兵の捕虜になり、ハワイに
連れられたと言う。二十三年に復員し
て私達が本土へ行くということで案内
してくれた。ベトナム戦争や難民を見
るにつけ、過去を想い出す。余りよい

気はしない。戦争の傷跡はいつまでも
消えそうになく、心の底から、平和な
日々を送りたいものです。

追 想

一、荒波の 向こうに聞ゆ 海なりは
摩文仁が丘の 友に呼び交う

二、炸裂の 音も悲しや 鉄かぶと
主亡き原に 朽ちて花咲く

三、大空に 日の丸一機 急降下
火花となりて 今日も散りゆく

四、うら若き つぼみ花咲く ときあるに
咲かずに散らす 大和魂

五、姫百合の 苦しさ偲ぶ 縄梯子
学びの友と 散りし洞穴

六、畠より 鋏をスコップに 持ちかへて
召された人は いずこで眠る

七、国想う 少年学童の 護郷様
竹槍武器で 防ぐすべなし

今も忘れじ

K・Sさん 60歳

摂津市正雀本町

夫や子を再び戦火に送ること思うだに怒り湧きくる

戦争の悲惨さ今に忘れ得ず骨も還らぬ兄のこともも

モンペの紐解き眠りし夜はなくて糧求めゆく四国路はるか

松笠を拾いて焚きし風呂の夜隣組みなひそと寄りくる

狭庭辺に南京芋と慣れぬ手に作りしあの日今も忘れじ

生と死と歳月と平和と

M・Oさん 63歳

摂津市千里丘

歳月というものは恐ろしい。あれ程強烈で自分の死と対決した私のあの体験が、いま、さて——それを改めて書こうとしてみたら、永い濃い過去という歳月の霧が、記憶の前に壁のように立ちほだかって抵抗することをつくづくと知るのである。私は四十一年前のあの忌まわしく恐ろしい私の体験を一生懸命思い出しながら書いた。昭和十九年七月三日、私の乗っていた重駆逐艦「五百島」は硫黄島目指してひた走っていた。任務は同島守備隊への武器弾薬補給である。

当時、アメリカは硫黄島を虎視眈眈と狙い、同島を中心に多数の潜水艦をバラマキ、最早商船での補給は不可能なために軍艦を使つての補給作戦であ

る。だがその軍艦でさえ、二段、三段に待ち構える物量のアメリカ潜水艦の前には安全の保障はあるべくもなく、私達は「いつかはやられる!!」の予感と恐怖のもとにその死の海域に乗り出していかねばならなかった。(この予感はヨットで太平洋横断などという遊びのスリルとはレベルの違う、全く異質のものである。今の冒険家がこの恐怖の待つ死の海へでも果して本当にのり出して行けるかどうかは疑問である) その日朝四時前、非番だった私は後部左舷のデッキで寝ていた。

突如、頭上で緊急ブザーが不気味に鳴りだした。「ハッ」と目をさました瞬間、私はとてつもない音を耳の中へ叩きこまれていた。

「パパーン、パパーン」両耳の中へカンシヤク玉をギュウギュウ詰め込んで一ペンに火をつけて、両方同時に破裂させたようなまるで音の化物だった。

音と同時に私はデッキの端までスツとんで、テーブルと壁の間に落ち込んだ。が、幸いに私は一番上になったので反射的に跳ね起きた。つむっていた目の上を青白いものが音と同時に広がったのを覚えている。だが(何事が起ったのか?) まるで見当がつかなかった。

心の隅で「アメリカの魚雷にやられた」と思いたくなかったのかもしれない。電灯は消えている。「当直が発電機を故障させやがった!!」と私は判断した。作戦航海中に発電不能という事になったら軍法会議だ。私は発電室へ応援に行こうと一歩踏み出した。その途端だった。またもや一発、さっきと同じ物凄い音が起こった。今度は目を皿のようにあけていた。しかも立っていた。圧のかかった熱い風に飛ばされた。私はデッキにしたたか叩きつけられた。耳はチーンと鳴り、目がとけてしまいそうな程痛い。私は倒れたまま

暫く動くこともできなかった。何分か経った。

その内ようやく耳鳴りの少し治まってきた耳に、シュルシュルという小川のせせらぎのような音が入ってきた。水である。海の水が板子一枚を通して入ってきているのだ。ここに至って、私は「五百島」が敵の潜水艦の魚雷にやられたのだという事実に気づいたのである。水は刻々と増えてきた。天井に届くまでに脱出しないと助からない”ときいていた。痛む体をおして立ち上り、ラッタル（階段）の方へ行こうとしたが何という無惨だ。デッキはめくれ、裂け、テールはひっくり返り、その合間を負傷者が呻き、のた打ち、足の踏み場もない光景の中を煙硝の匂いと煙が渦を巻いていた。やっこの思いでラッタルの踊り場へきた。が、何という事だ。ラッタルは外れてデッキへ長々と伸びている。私は自分の考え

の甘かったことを痛感した。水はもう胸まできている。（私はここで死ぬのか?!）思わず天を仰いだ。と、その頭上にチカチカ朝の星がまたたいていた。奇蹟的にも頭上に穴があったのだ。その穴は対空機銃座が被雷の衝撃で吹っ飛んで、上甲板をむしりとった穴だった。

私はその穴から命からがら上甲板へ脱出した。だが、上甲板には更に酸鼻の光景が展開していた。主砲が砲座ごと横倒しになっていて砲員が二人、一人は両足を砲身の下敷にされくの字にちぎられていた。一人は砲席もろとも爆風でとばされ、折れ曲ったマストに串刺しになっていた。後部艦橋にまともに叩きつけられ生スルメのように薄っぺらくなつて自分の血の海の中で断末魔の痙攣（けいれん）を起こしている兵隊がいた。全身灰色の爆熱を浴びて焼鳥のよ

うになった下士官がデッキにはりついている。

誰か一人向こうむきになって用具箱に腰をかけているので「イヤに落ち着いているなア」と思つて前へ回つてみたら、右のすね小僧に私の握りこぶしよりも大きい穴がポカリとあいていて、その穴の底に赤い糊のような血の池が出来ていた。穴の回りのお椀のふちそっくりの白い骨の傷口から、溢れ出た血が向うすねに赤い滝を作り、その血が甲板を赤い蛇のように流れている。右目の上にも親指が楽に入っている。右な穴が脳内深くあいていて、その穴からふき出す脳みそまじりのドロドロの血は、顔から胸を血だるまにしている。口から泡をふき全身は既に硬直している。私は地獄をこの目で見た思いがした。私も両足に負傷していた。艦が、ガクンと不気味に胴ぶるいをした。「もう五百島は助からない」思っ

た私は思いきつて海へとびこんだ。大勢が泳いでいた。艦にも多数残っていた。と、艦尾がぐつぐつと海面下にメリこみ出した。「おお艦尾が沈むぞ!!」と見ていると、艦に残っている総員がめいめい肩に何やら担いできて、ホール（艦首甲板）に集合を始めた。つまり艦尾部の重量物、弾薬、米俵等を艦首に移して更にその上に人が乗り艦の重心を保とうとしたのだが、三千トンもある物が水を呑んだらこれくらいの細工ではビクとも効果はなかった。

「五百島」はみるみる竿立ちをはじめ、遂に直角近くなっていた。こうなると物の上に人がのっているのだからたまったものではない。物がおちる、人がおちる。物と人がごっちゃになって落下していった。

これで艦に残っていた殆んどが死んだ。たとえようのない心細さが私を

襲った。一番近い陸地で百マイル先の硫黄島である。救助艇が来た夕方四時すぎまでに何人の者が力尽きて沈んでいた事か……。私は十二時間、自分の死を見つめながら泳いでいた。ただ一途に両親の懷と、水遠の平和を求めながら……。

石の中に産んだ女たち

N・Sさん 45歳

摂津市鶴野

白い車の中から花束をつかんでおりた男
手を合わせている

比島方面ルソン島東海岸に於テ戦死

二十七歳

母トラ

八月の墓地は死者であふれる

味舌下の村も死者が歩いていく

安威川のほとりの味舌下の墓地

供えたグラジオラスの花が咲きつづけている

中華民国湖南省で戦死ス

二十六歳 マスオ

母カル

正面の黒いラベルのウイスキーが

にえるほどあつい

石の中にアリが生みつけたタマゴのように

女たちは産みつけた

夏になるたびに産湯を浴びせ

手を合わせる

墓地のそばの住宅地の子供の声

陸軍歩兵軍曹

勲七等功七級

三十七歳 市郎

ビスマーク諸島に於テ戦死

母マツノ

夏は女たちをつかれさせる

女たちを無口にしてしまう

女たちは石の中で眠ってしまった

死へのさすらい

―マニラ東方山岳戦の記録―

O・Kさん 68歳

摂津市正雀本町

フィリッピン戦線の戦没者は約五十万人。短期間にこれほど多くの戦死者を出したのは世界の戦争史上例がない。私が引率していた経理幹部候補生四十名中生還したのは僅か八名、戦死者の率八十パーセントはマニラ東方山岳戦における全部隊の平均値である。

フィリッピンに関する戦記は数多くあるが、マニラ東方山岳戦の記録はあまりない。私は自身の悲惨な戦争体験を語り継ぐと共に、マニラ東方山岳戦の記録をとどめる意味で、「死へのさすらい」マニラ東方山岳戦の記録」を発行した。その本に挿入した私のスケッチの一部をここに掲載する。

〔1図〕バシー海峡で二度魚雷攻撃を受けて輸送船六隻、駆潜艇二隻が撃沈された。

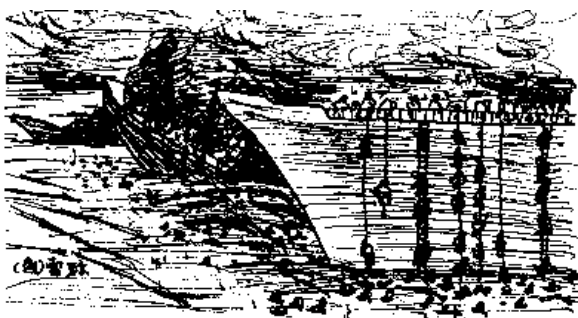
〔2図〕ルソン島沖での三度目の魚雷攻撃の時に私の輸送船に魚雷が命中して沈没し、戦友十二名が戦死、三名が負傷した。私は七時間の漂流後、最後に救助された。さらに半月後マニラ湾内で艦爆機延べ四百機の空襲を受け、輸送船に二発の爆弾が命中して戦友五名が戦死、二名が負傷した。

〔3図〕配属されたマニラ防衛司令部が東方山中に布陣した後も私はマニラに残留し、空襲と反日ゲリラ活動下でエンジンの部品集めと決死的輸送にあたる。私が引き揚げた二日後に米軍がマニラに侵攻してきた。

〔4図・5図・6図〕空襲と砲撃を避けて物資を山上に輸送する。軍律乱れてゲリラ化した脱走兵が輸送隊を襲う。武器弾薬を棄て、食料尽きて飢餓

地獄をさまよい、餓死者が続出する。現地民自警団と食料を奪い合う。

〔7図・8図〕武装解除にきた米兵に餓死寸前に救助され捕虜収容所に入る。復員船中で発病し、鹿児島陸軍病院で手術を受ける。



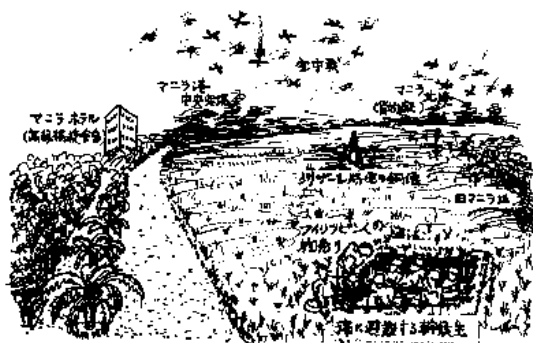
1 図・避難者の救助 (昭和十九年十月二十六日)

魚雷攻撃中の救助作業は命がけである。出来るだけ多くの遭難者を救助するために大きな群れの傍に船を止め、甲板上からロープや縄梯子を垂らす。海面から甲板までは五メートル程あり、ロープを次々と登る人の先頭が手をすべらすと、続く人全部が落ちてしまう。



2 図・漂流 (昭和十九年十月三十一日)

暴風下の雨の幕は視界を閉じ、風音は救助の気笛や漂流者の軍歌の声をと絶えさせる。筏にとりつけない人は散って姿を見えなくする。筏に青竹を立て禪 (ふんどし) をむすび、発見されることを祈る。筏の上に寝かせた負傷者がねむって死なないように交替で青竹で叩く。



3 図・空襲下のマニラ (昭和十九年十一月頃)

空襲毎にマニラの物価ははねあがる。日本軍の軍票乱発でさらにあがり、日本軍に対するにくしみを増す。空襲下でも壕に避難する日本将兵の所に現地人の物売りがやってくる。空襲がこわくないかと尋ねると「アメリカ、フィッピン人コロサナイ」と答える。



4 図・孤独の集積所(昭和二十年六月頃)

アメリカ軍に山中に追いあげられ、峻険な道を輸送する物資集積の中継基地に独りで勤務する。軍律が乱れて部隊を脱走し、ゲリラ化した兵が物資を略奪する。餓死し白骨化した死体が川に流され、岩にぶつかってばらばらの白骨が岩陰に散らばる。



5 図・洞窟内の白骨死体(昭和二十年七月頃)

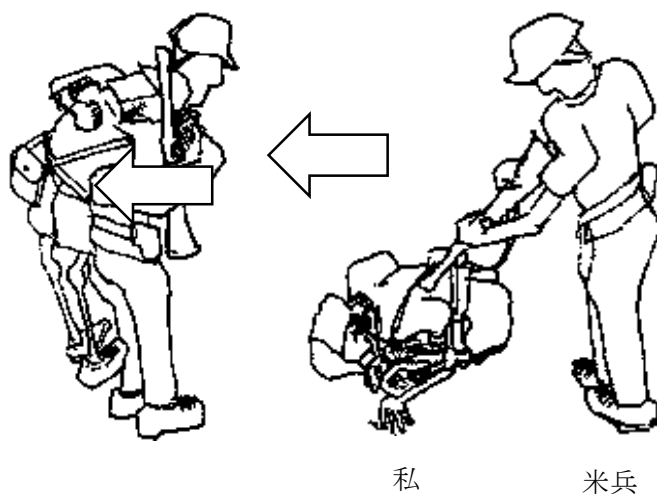
空襲や砲弾を避けて岩陰や洞窟内に避難したままに動けなくなり餓死する。息を引き取る前から蛆虫(うじむし)に肉を喰われて指の骨が見える。死後五、六日は強く異臭を放ち、十日位で全身が白骨化する。このような死体を抱くようにして空襲や砲撃、雨露を避ける。



6 図・岩のくぼみへ埋葬(昭和二十年八月頃)

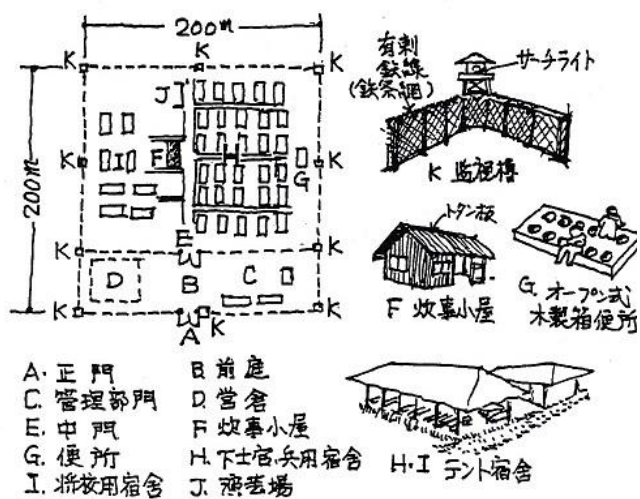
病気や疲労で動けなくなれば部隊から置き去られる。テントを張ったり、木陰に寝かせるのがせめての友情である。道端や山の斜面には放置死体がある。埋めるにも道具がない。川原では小石を積み、山道では岩のくぼみに押しこむのが最高の埋葬である。

7 図・餓死寸前の（昭和二十年九月十五日）
 アメーバ赤痢とマラリヤを患い歩行も困難な時に米機のまいたビラで日本の降伏を知り、現地で降伏調印が終わって山を降りる途中で部隊に置き去られ、餓死寸前に武装解除に来た米兵に救助され、背負われて山を降りる。米兵の背の上で私は意識を失った。



私

米兵



8 図・捕虜収容所(昭和二十年九月〜十二月)
 広い砂糖黍畑の中の鉄条網の収容所に第一号収容者として入り、後から投降して来た人達の収容所作りをする。朝食は重湯、昼食はお粥、夕食はお子様ランチと生存に必要な最低カロリーの食事給与と炎熱下の使役、自暴自棄の日々を過ごす。

戦旅のうた―侵略の日々―

T・Oさん 67歳

摂津市正雀本町

昭和十四年五月、鳥取歩兵連隊に召集され、同年八月北支派遣軍第百十師団第四百四十連隊所属の一兵士として河北省各地を転戦の後、十七年五月、中支に転進。浙江・江西両省にまたがる「浙かん作戦」に参加し、同年九月、旧満州間島省（現吉林省）延吉に転進し、病を得て十八年八月北海道旭川陸軍病院より予備役免除となり除隊。拒馬河^{きよまがわ}渉り^{なつめ}棗林^{さうりん}過ぎ山に入り

石亭鎮の前線に着く

村に入れば目の汚なき犬牙むきて

吠え立てるなり我ら敵なれば

ことごとく家を焼かれし農夫らが

ふり返りつつ山陰に消ゆ

夜半醒めておればいかにも切なげに

驢馬^{ろば}が鳴くなりわれも切なし

死すること帰するが如く楡^{いれ}の樹に

くぐられし者胸射抜かれぬ

（捕虜銃殺）

死せる八路が持ちいし郭沫若の著書

大休止のたび少しづつ読む

大義なき「聖戦」^{いくさ}糾^{ただ}しし代議士よ

その子の大尉郭橋に死す

※昭和十五年二月二日、斎藤隆夫代議

士は、国会本会議場に於て横暴非道

なる軍部の糾弾演説を行ない除名追

放さる。その子息は河北省平郷県郭

橋にて戦死す。

うら枯れて見るものもなき野の果てに

大行山があわあわと在り

コトコトと飯盒に物煮ゆる間を

まどろみており戦なければ

進撃の日は刻々と迫りおり

そら豆の匂う夕ぐれ

（杭州郊外の古蕩鎮）

敵追いて夜も昼もなく追い続け

もうろうとして歩きつつ眠る

砲声のとどろくさえも夢うつつ

歩きつつ眠り眠りつつ歩く

戦闘のと絶えし時ぞ食わねばならず

泄^たさねばならず眠らねばならず

捕虜（四首）

捕われし若き上尉よ天仰ぎ

「要殺就殺！」^{はやくころせ}と悲憤の号泣

捕われし若き女兵よ滂沱^{ぼうた}たる

涙流せど命は乞わず

後ろ手にくくりし者を列に入れ

篠つく雨の中を敵追う

隊列の後より銃声二三発！

かの捕虜はついに始末されしか

馬上より叱咤の大隊副官よ

もんどり落ちてそのまま動かず

担架にて「水を」と求めていしが

もう水もなにも要らない秋山の

冷たき顔に芋の葉のせやる

今日はいよいよ死ぬかも知れず

先陣の渡河隊めがけ敵弾しぶく

家具積み上げ戦友を焼くその火にて

炊飯すなり物を干すなり

死者焼く火「すぐ消せ！敵が狙う！」という

火を消せば仏は生ま焼けとなる

用足して進む隊伍に復す間を

小便十丁糞一里という

落伍して隊をはぐれし病兵が

「どうか殺してください」と哭く

遺棄されし病馬よ虚ろな眼にて

過ぎ行く兵の列を見ていし

遺棄死体浮べる沼で米洗い

シャツを洗いて戦い暮れぬ

今日もまだ命はありて黄昏に

飯炊きおれば鶉啼くなり

兵士の余り物煮る苦力らが

声をひそめて話し合いおり

富陽より連れ来し苦力老阿東の

やつれ果てたる寝顔を哀れむ

浙江省諸葛鎮は諸葛孔明ゆかりの地なり

孔明の末裔らがドラを打ち鳴らし

皇軍歓迎というをあやしむ

戦火熄めば日は玲瓏と渡るなり

葦は水辺に野は野茨咲き

昭和五十六年六月、四十数年ぶりに中国を訪れて四首

赤軍と死闘交えつ大行山を

さまよいし日は遙かなりけり

大行軍区軍司令官聶栄臻

四十年経し今も忘れ得ず

昔船で渡りし記憶なつかしみ

長江大橋の上にたたずむ

遠き日の償い難き罪負いて

八達嶺の風に吹かるる

私が体験した戦争と平和

―フィリピン戦線―

I・Iさん 70歳

摂津市千里丘

昭和十六年十月十五日、徴兵検査で第一乙種の私にも召集令状が届いた。対米英間に暗雲が漂い、風雲益々急を告げている時で自分達初年兵の演習も随分と激しいものであった。兵隊となった以上は覚悟していたのであるが、生活の場である内務班で小さなことでピシシやられる私的制裁には参った。昼食後に下士官室にある班長の食膳を下げるのを忘れたとの些細なことで、連帯責任だと言って初年兵一同総ビンタを受けた。また靴の手入れが悪いと言って、首にぶらさげて中隊内の各班を回らされたり、そのほか数え上げれば限りがない。

加えて軍隊独特の言葉も苦労の種であった。シャツ（襦袢^{ジュバン}）、パッチ（袴^{ヘンジョウ}下）、靴（編上靴^{ヘンジョウ}）、便所（廁^{カワヤ}）、売店兼食堂（酒保^{マキヤ}）、ゲートル（巻脚絆^{マキヤハシ}）、洗濯物干場（物干場^{ブツカンシヨウ}）、手紙（書翰^{カン}）、散髪（理髪）、風呂（入浴）、等々であるが、一朝一夕には憶えられない。例えば「便所へ行きます」などとうっかり言えば「貴様はまだ地方気分を出しやがって」とビンタが飛んでくるので、全く油断も隙もない毎日なのである。緊張と恐怖感の連続で三カ月の教育期間が終了し、三八式歩兵銃を肩にしてフィリピン戦線に向かって船出することとなった。約一週間程の航海でルソン島のリンガエンに上陸。時は二月下旬のこと、寒い内地から炎熱のフィリピンへ来たのである。太平洋戦争が勃発するやアメリカ・フィリピン軍は首都マニラを放棄してマニラ湾の北西に位置するバターン半島および入口の

コレヒドール島に堅固な陣地を構築し、豊富な物量に物を言わせて昼夜を分かたず各種の火砲・機関銃等で猛烈に射ってくる。飯盒炊事もままならぬ状態で燃料の竹は不自由ないのであるが、煙が上がると砲撃の目標となる。

夜のジャングルの行事も困難で台湾の高砂族が先回りして雑木や竹を切つて通路を開いてあるのだが、切り残しが十センチか十五センチ出ているので暗さは暗しで進みにくいこと、全く泣きたいほどの難儀な行軍であった。夜明けとともに行軍が続くのであるが、所々に故陸軍上等兵何某、故陸軍一等兵何某との墓標が立っており、こんな姿になつてはならない。しかし行く手にはどんな危険が待っているかはわからない。

敵の遺棄死体はほとんどがフィリピン兵で米兵の死体は見当らない。屋根型の鉄条網を延々と張り巡らしてあって、

とても飛び越えることはできない。ここでまごまごしているとところへ機関銃や迫撃砲を撃ち込む計画だったのだらう。甘諸畑が至る所にあつたのは有難い。手折って食べたものだ。咽喉の渴きが忘れられる。その上甘いので大助かりだ。馬にも与えると、うまそうに嚙んでいた。また水牛がところどころで死んでいるのも痛ましい光景であつた。

ナチブ、サマツト山、マリベレス山では次々と敵陣が陥落し、大勢の敵兵が両手を挙げて山を降りて来た。米兵、フィリピン兵、中には中国人らしき者も若干混じっていた。折から〇〇部隊の軍旗が通りかかると、隊長らしき将校が「捕虜は軍旗に敬礼せんか」と大声で怒鳴っている姿まで見られた。

バターン半島の戦闘が終わると次は半島の南、マニラ湾に浮かぶコレヒドール島への攻撃である。島の要塞砲は以前から猛烈に撃ち込んできて、

バターンで戦闘中の友軍も随分と苦しんだ。ドラム缶と呼ばれる大口徑砲でシュツシュツと、不気味な音を立てて自分達の頭上を越えて後方の陣地へ落下するのか、大きな地響きを立てて炸烈する。しかし友軍機が要塞の上に飛来すると要塞砲は沈黙する。やはり爆撃が恐ろしいのであろう。

昭和十七年五月七日、コレヒドール島が陥落し、山のあちらこちらに白旗がはためいている。これでフィリピンの戦闘は終結し、マニラ郊外のマツキンレーの兵舎で内地帰還の準備を進め、一カ月後にマニラ港より乗船し四カ月ぶりに故国の土を踏んだ。戦友達の中には戦死した者、マラリヤ、またはその他の病気で異国の土になった者も多数あり、微傷もせず原隊に戻れた自分は本当に幸運と言う外はなく本当に嬉しかった。

昭和二十年七月からの日中戦争で多数の将兵、多額の国費を消耗し、さらに当時は世界一の裕福な国と言われたアメリカ。海外に広大な領土を有し、日の没しない国と言われたイギリス。

この両大国を相手にしては国力の限界がきたのであろう。近代戦は消耗戦であつて資源の乏しい日本では即戦即決を望んでいたのだが、舞台が広い太平洋では思うようになかった。豊富な物量に物を言わせた米英側の猛反撃が始まり、南洋の日本の委任統治領のマリアナ群島を占領した米軍が遂に大型の爆撃機 B 29 の大編隊で本土を襲うようになった。軍事施設は勿論、多数の市民や民家が犠牲となり、これ以上の戦争継続は不可能となって、残念ながら無条件降伏となった。

久々に電灯が輝き、空襲もなく地獄から極楽へ一変したのであるが、生活物資の極度の不足と食糧の確保のため

には死物狂いであつた。闇市で芋やパン、餅などを買って、むさぼるように食つたことを思い出せば現在は夢のようである。焼跡には各社のビルが林立し、車は飽和状態で交通地獄を現出し、紳士・淑女は着飾って濶歩している。当時を思えば隔世の感がする。この結構な平和が永久に続かないものかとつくづく思う。

悪夢のような戦争は二度とあつてはならない。米ソ両大国の間も軍拡競争のような気がする。イラン、イラクの戦争も無関心ではいられない。どちらも産油国であり、この石油に依存する日本としても対岸の火事とは思えず長びくとロクなことはない。少なくとも第三次大戦の引金になるようなことにならないように切望して四十年の昔を偲びつつ私のまずい体験談を終る次第であります。

軍使―ビルマ戦線―

N・Sさん 77歳

摂津市正雀本町

昭和二十年八月、ビルマの戦局は日本軍には極めて不利な展開となり、すでにビルマ方面軍司令部は首都ラングーンを放棄するとともに、撤退する兵力を天然の要害であるシタン河の左岸地区に集結、布陣して、同河を挟んで敵軍と対峙^{たいじ}していた。

このシタン河の渡河点は、かつて日本軍がビルマ進攻の際に連合軍をこの狭隘な地点に追い詰め、渡河、退却せんとする敵軍を空陸からの銃砲爆撃により一挙に撃滅し、シタン河の流れが血で紅く染まったといわれる地点で、それから数年後のいま、ビルマ方面軍の主力は逆の立場になって、このシタン河の渡河点に追い詰められ、渡河、退却せんとする多数の日本軍将兵が

血を流した悲劇の地点である。私達の蘭第六七部隊は、インドとビルマの国境方面から撤退してくる友軍が嚴重な敵軍の封鎖線を突破し、無事にシタン河を渡河して友軍陣地へ到達するのを援護するため、シタン河右岸の渡河地点付近の部落に進駐した。そして同部隊第一中隊第一小隊は、対峙している前面の敵部隊を牽制するために、斬込隊を編成し、雨季で膝まで没する洪水の中について、敵陣地への夜襲を繰り返し敢行していた。

昭和二十年八月十七日夕刻、第一小隊では第七回目の夜襲を決行するため、擲^{てき}弾筒や火焰ビンなどを準備し、当夜の斬込みの手筈^{はす}を進めている小隊長の許^{もと}へ、中隊本部から「N小隊は本夜の夜襲は取り止めにすべし。前線へ白旗を掲げて敵の軍使が来るかもしれないから、その時は丁重に取り扱って部隊本部に連行すべし」という命令が届

いた。この命令は直ちに前線の歩哨へ伝達された。

翌十八日の午前十時頃、前線の歩哨から「前面の敵方部落と味方部落とのほぼ中間にある小高い地点で、白い旗らしいものを振っている」という連絡があったので、私は昨夕の中隊本部命令中の「敵の軍使」であろうと直感した。

私は直ちに下士官一名を伴って同地点に赴いたところ、そこから少し離れた窪地のところに、約二個分隊ほどのビルマ兵が伏せをしていて、その中から隊長とおぼしい一人が自動小銃を構えた兵隊に守られながら私の所へ近寄って来た。私はこの瞬間、ひよつとすると撃たれるかもしれないという恐怖を感じ、腰につけている手榴弾をしっかりと握りしめた。

私達は、暫く沈黙のまま見詰め合っていたが、お互いに少し落ちついてく

ると、やがて少したどたどしい日本語で、
彼は「日本軍は負けた」と言った。
私は「そういうことは何も聞いていない」と答えた。

彼は「戦争は終わったのだから、この
方面の停戦について英軍部隊長
と日本軍部隊長と打合せをした
い」と言った。

私は「それなれば私があなたを日本軍
部隊本部へ案内をしよう」と答
えた。

彼は「それはできないから、両軍の部
隊長が会見する日時と場所のこ
とについて、明朝十時にこの場
所でもう一度打合せをしよう」
と言った。

私は「部隊に帰って部隊長にこの会見
のことを報告して、その命令を
受けてその旨を明朝回答する」
と答えた。そして

彼は「両軍は戦争をしているけれども、
私達はお互いに憎しみはない、
友人だ」と言った。

私は「私もそう思う」と答えた。
彼は「日本軍は食糧や物資に不足して
いると聞いているが、困ってい
ることがあれば遠慮なく言っ
てくれ」と言った。

私は「御好意は有難いが、日本軍は何
も困窮していない」と答えた。
最後に、

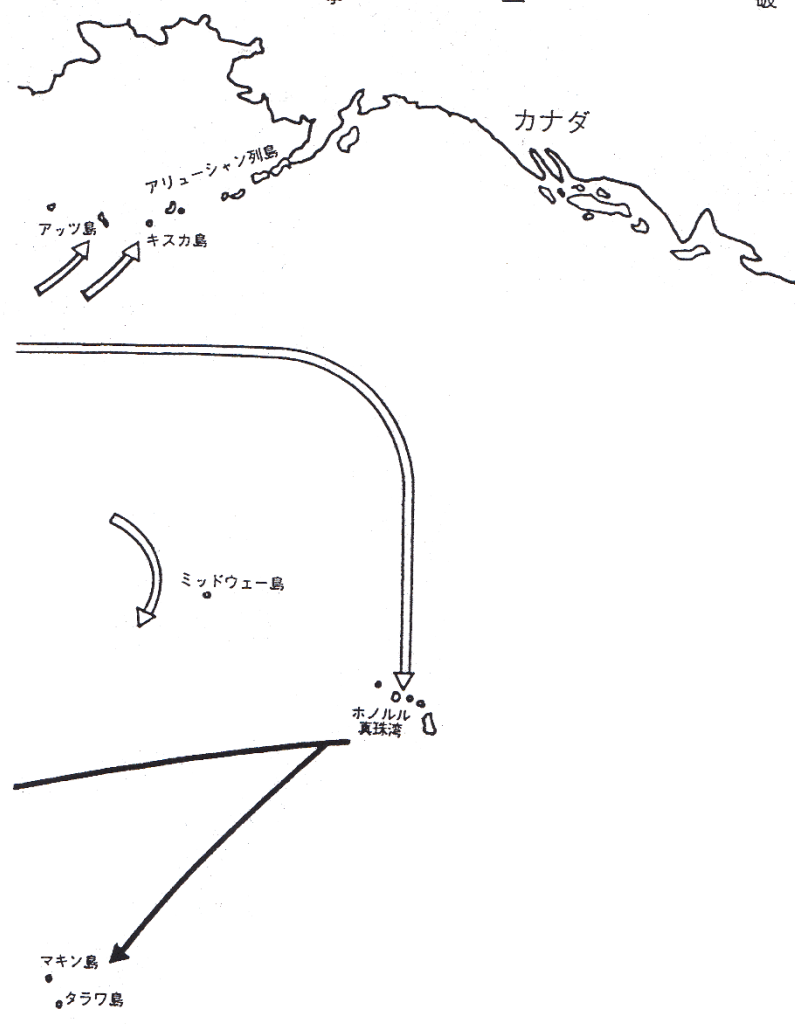
私は「有難う、さようなら」
という言葉に万感をこめて別れを告げ
た。ほつとして見上げる空に、雨季明
けが近づいたせいかわ、どんよりとした
雲間から微かな陽射しがこぼれた。

私は帰隊後、直ちに部隊本部へ会見
の要旨をしたためて伝令を出したが、
それと行き違いに部隊本部から「N
小隊は本夜前線を撤退して中隊本部に
集結すべし」という命令が届いた。

その夜、私は明朝に敵の軍使と会う
ことを約した場所に「ワガタイハブタ
イホンブノメイレイニヨリタノチクニ
テンシンスル、キグンノセントウワイ
ノル」と書いた立札を残して、篠突く
雨が私の身も心も洗い流すように降り
しきる暗夜の中を小隊のしんがりと
なって撤退した。

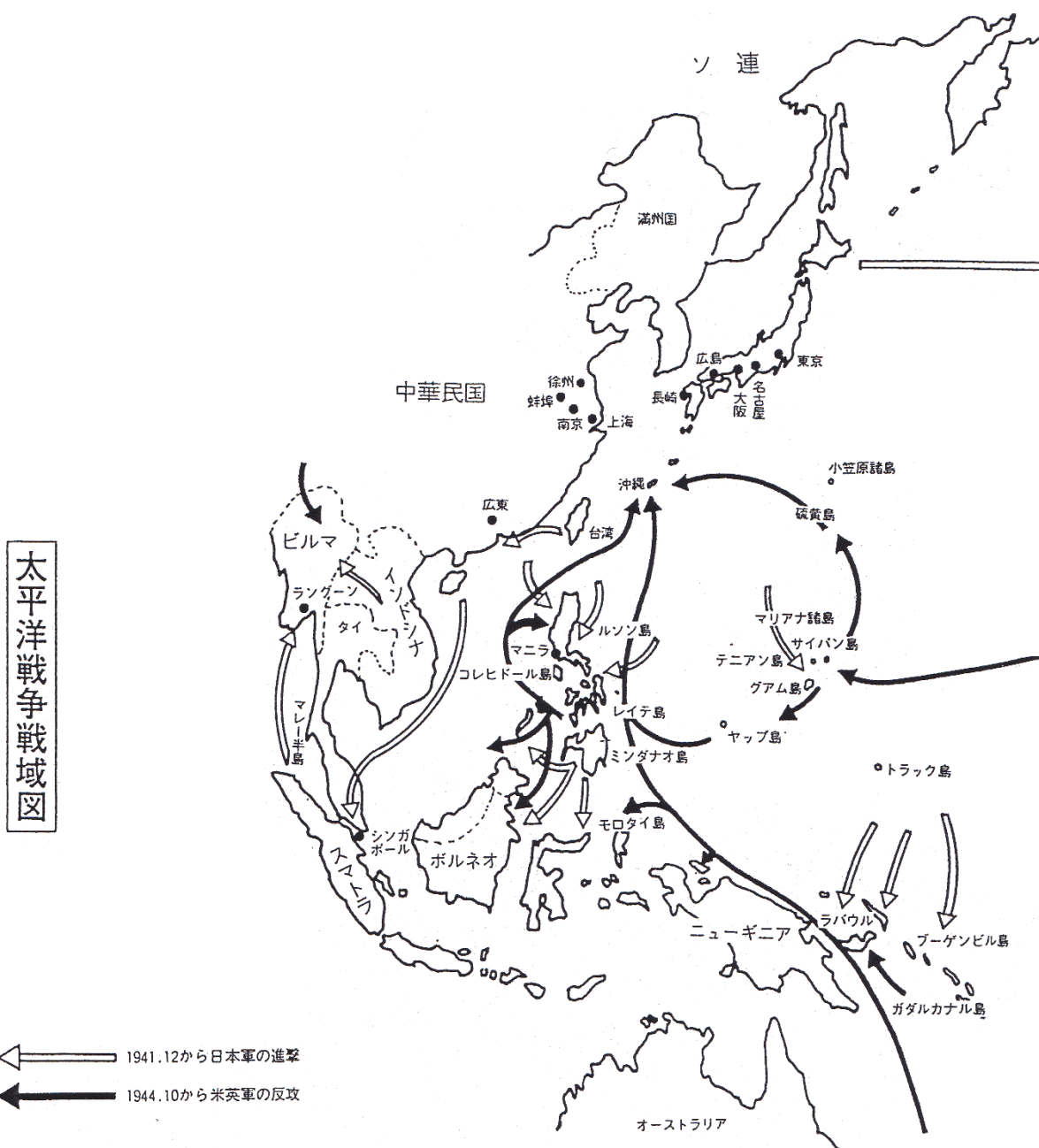
年表

- 昭和6(1931)年
 - 9・18 日本陸軍、武力占領を拡大(満州事変)
- 昭和7(1932)年
 - 1・28 日本軍、上海へ出兵(上海事変)
 - 3・1 満州国建国宣言
 - 5・15 犬養首相、海軍将校に暗殺される(五一五事件)
- 昭和8(1933)年
 - 3・27 日本、国際連盟を脱退
- 昭和9(1934)年
 - 12・29 日本、ワシントン海軍軍縮条約を破棄
- 昭和10(1935)年
 - 8・10 中国共産党「救国抗日」を宣言
- 昭和11(1936)年
 - 1・15 日本、ロンドン軍縮会議を脱退
 - 2・26 陸軍皇道派青年将校クーデター(二二六事件)
 - 11・25 日独防共協定調印
- 昭和12(1937)年
 - 7・7 日中戦争開始(盧溝橋事件)
 - 12・13 日本軍、南京を占領(南京大虐殺事件)
- 昭和13(1938)年
 - 4・1 国家総動員法公布
 - 5・19 日本軍、徐州を占領
 - 10・21 日本軍、広東を占領
- 昭和14(1939)年
 - 5・13 満蒙国境で日ソ軍衝突(ノモンハン)



- 昭和19(1944)年
 - 6・19 マリアナ沖海戦で制海権を失う
 - 7・7 サイパン島の日本軍玉砕
 - 8・10 グアム島の日本軍玉砕
 - 8・23 学徒・女子挺身隊勤労令
 - 学童疎開実施
 - 10・25 比島・レイテ沖海戦で日本軍連合艦隊壊滅、神風特攻隊出撃
 - 11・24 米軍B29、日本本土に爆撃開始
- 昭和20(1945)年
 - 3・10 東京大空襲
 - 3・12 名古屋大空襲
 - 3・13 大阪大空襲
- 昭和21(1946)年
 - 3・17 神戸大空襲
 - 硫黄島の日本軍玉砕
 - 4・1 米軍、沖縄本島上陸
 - 6・23 沖縄地上部隊全滅
 - 7・26 対日ポツダム宣言発表
 - 8・6 広島に原子爆弾投下
 - 8・9 長崎に原子爆弾投下
 - ソ連軍、満蒙国境で日本軍に攻撃開始
 - 8・14 日本、無条件降伏(ポツダム宣言受諾)
 - 8・15 戦争終結の詔勅(玉音放送)
 - 8・26 満州で日本人約一〇〇〇人が玉砕
 - 9・2 ミズーリ艦上で降伏調印

- 事件)
- 7・8 国民徴用令公布
- 9・1 ドイツ、ポーランドへ進撃(第2次大戦勃発)
- 昭和15(1940)年
- 9・27 日独伊三国軍事同盟調印
- 10・12 大政翼賛会発足
- 昭和16(1941)年
- 3・10 治安維持法強化
- 4・1 小学校は国民学校となる
- 米穀通帳配給制実施
- 10・18 東条英機内閣成立
- 12・8 日本軍、ハワイの真珠湾を奇襲攻撃(太平洋戦争始まる)
- 日本軍、マレー半島上陸、タイ進駐
- 12・10 日本軍、ルソン島上陸、グアム島占領
- 12・19 言論・出版結社臨時取締法公布
- 昭和17(1942)年
- 1・2 日本軍、マニラ占領
- 1・23 日本軍、ラバウル上陸
- 衣料は点数切符制に
- 2・15 日本軍、シンガポール占領
- 食糧管理法公布
- 3・8 日本軍、ビルマ・ラングーン占領
- 5・7 コレヒドール島の米軍降伏(日本軍東南アジア全域制覇)
- 6・5 ミッドウェー海戦で日本軍敗北、米軍の反攻開始
- 昭和18(1943)年
- 2・8 ガダルカナル島で日本軍敗退
- 4・18 山本五十六連合艦隊司令長官戦死
- 5・29 アッツ島の日本軍玉砕
- 10・21 学徒出陣
- 11・25 タラワ島の日本軍玉砕
- 12・27 米軍、ラバウル猛空襲



だいじな平和

H・Tさん 34歳

摂津市東別府

「鬼は外、福は内」と一年生の娘と大声で豆まきができる幸せ。そんなのかな幸せを毎日味わえることに感謝しなければと平和の尊さを考えるとき、つくづく思い知らされます。

私は戦争の体験はありません。私の父は、仕事を終え、夜お酒を飲みながら戦争の話を子供達に時折してくれたものです。二十一歳位でインドネシアのスマトラ島に約二年半程行っていたそうです。無事日本に帰ってきた時は、おばあちゃんがほんとうにほんとうにうれし泣きをしたと聞かされました。その時は「ふうん」と聞いていました。が、いま結婚して子供を育てている中、わが息子が生きて帰れるともわからな

い所に送り出すことを考えただけでも恐ろしい思いがします。

人間の命は、何ものにもかえがたい尊いものです。

日本では、アフリカ飢餓救援運動が叫ばれています。干ばつによる飢えに苦しむアフリカ諸国の人びとを救える日本の平和と豊かさを喜ばねばと思います。

こんなに日本は平和になったのに日本の中はどうして殺伐としたニュースが多いのでしょうか。校内暴力、車内暴力、お菓子会社への脅迫など。もともと人と人の命の大切さを思っ

真の平和とは、やはり住みよい町、住みよい日本から出発していくものだと思います。

兵営生活

M・Hさん 69歳

摂津市鳥飼西

みんなどんな気持ちで徴兵検査を受けたらう。丸裸で精密検査、お尻を一発「パシッ」甲種合格だ。いよいよ来るべき時が来たと覚悟するものの不合格者達の笑顔がうらやましく感じられた。

翌年一月十日入隊までの心の準備、特に軍人勅諭の暗唱が大変。お経のように長文のため、夜は一生懸命歌の文句に

へ文明開化の世の中に軍隊生活知らないか知らねば私が説明する花の三月検査受け親に甲斐性がないゆえか彼女の願いが薄いのか役場の親切足りぬのか明ければ一月十日には数多くの人に見送られ可愛い娘ちゃんと泣別れ着いた場所は馬場町

以上のような歌が今も忘れられない。

正月十日入営。一つ星の軍隊生活が始まる。起床から就寝まで、すべてラッパで始まり、終る。六時起床営庭へ。人員点呼一二三と競争で、衣服のボタン一つ外れも許されない。朝飯も総て競争だ。寒い凍るような営庭で基本教練が毎日続く。休憩の間以外は用便も許されない有様だ。新兵一人に古兵一人の戦友が何かと教えてくれて面倒をみってくれるが、夕食後は厳しい内務の躰等、また返事はすべて直立不動の姿勢で復唱せねばならない。一寸の気の休まる暇もないし、ただ九時の消灯ラッパが唯一の憩であるが、一つ間違いを起こしたりすればパチッと叩かれる。五尺の寝台の毛布と敷布の間に戦友が入れてくれたあん餅も忘れて、朝氣付き後仕末に大閉口。また夜中は南京虫がゾロゾロと出て、身体中刺されて安眠も出来ず、食事は毎食炊事へ交代で

飯上げだ。

新兵の職業も巡查、大工、角力取りや、他にも女形の新兵もおった。毎日の教練は厳しく激しくて腹が減って一ゼン飯では足らず、戦友の目を盗んでは流しのわずかの残飯を手でつかんで食ってる新兵もめずらしくはなかった。

また古兵の洗濯掃除等一切せねばならず、こんな毎日の辛さに負けて脱走した者もあった。やがて基本教育も終り、三月いよいよ第一期の検閲が始まる。播州の青野が原の広びろとした演習場での訓練で、体力の弱い兵隊は落伍の続出で大変。それでも倒れるまで頑張らねばならない。次はすぐ二期の検閲が信太山で始まり、戦闘訓練はまた激しい。二十キロ近い軍装で山谷を渡り歩く。これを鶯の谷渡りと名付けた位づらかった。時には夜中の非常呼集で疲れた寝入バナを起され、完全軍装で営庭出發。何処へ行くのやらやがて生

駒山上へ。暗峠では落伍者が多数出て泣いたこともあった。

さて春四月、満州出兵の命令が下った。万歳万歳の声に見送られ、築港第三突堤より乗船し満州へ。朝鮮釜山港までの玄海灘は荒海で、五千トン級の軍用船も木の葉のように揺れて船酔で大閉口。軍用列車に三日も乗せられて首都新京(長春)へ。関東軍司令官の警備も半年余り。部隊はソ満国境へ。十二月になると気温も零下四十度の寒さに驚くばかり。暮近く、われわれの部隊は内地勤務要員として帰還。その時の嬉しさはまた格別。

さて、いよいよ二年兵になり勤務生活が始まる。第一は部隊衛兵で兵舎の警備、軍旗の警固等、昼夜にわたり務めねばならない。

次は大阪城の衛兵勤務で、城の玄関に控所があつて、城の周囲を回って警戒、淀君の化粧櫓^{けしょうやぐら}近くを立哨。堀の上

から大手前を眺めては溜息をしたものだ。また罪人の仕置場が城の東北「青屋口」にあつて、夜になると青い火の玉が出るとかで兵隊はみな怖がったものだ。

さらに、三十七連隊と八連隊の一週交代で枚方の禁野火薬庫の衛兵。淀川の堤を枚方への強行軍はきつく、たまには優しい将校「司令」の時は一般通行のトラックに便乗出来て嬉しかった。勤務は、小山の森の中で土手に囲まれた弾薬庫が多数あつて昼夜二、四時間交代で、四区に分れて庫の付近をグルグルと警戒。特に夜は真つ暗間でキツネ、タヌキが出没するとかで気味悪かった。ときどき本部より巡察将校が見回りに来るが、肝の小さい将校はビクビクしてさっさと引揚げるのが面白かった。

この火薬庫は一般人の工員男女がたくさん働いていて、守衛さん達とも仲

良くして大変楽しい勤務だったが、支那事变初期の十三年頃、東南隅の作業場内で砲弾の信管を装填中、誤って爆発。場内の作業員数人が吹っ飛んで死亡したそうで、そのあおりでつぎつぎと弾薬庫が爆発炎上して何一つ残りはなかった。この事故当時既に日支事変がたけなわで、数多の兵隊の応召や入営する若者達も、わずかの訓練だけで支那戦線へ出兵。それを見送る時の気持、今も当時が偲ばれて悲しくなる。以上はほんの軍隊生活の一部です。

私が見た大空襲の惨状

あの夜の大阪方面の空はアカアカと何時までも夜空に燃え上つて、おりからの南西風に乗って落ちてくる灰の雨。その夜は空襲で逃げ惑う人達の姿が臉に映つて寝苦しい一夜が明けた。幸に鳥飼方面は被害もなかったので急いで友と淀川堤を自転車ですた走り長柄

橋へ。この橋の南詰も焼夷爆弾にやられて穴だらけ。橋下で避難の人達の焼けただれた遺体。天神橋を渡ると松屋町は昨夜からの炎がメラメラとくすぶり続いて、家並はガレキの山としてあたり一面「ムツ」と鼻をつく悪臭。それは人間の焼けただれた匂いだ。

広い道路も中央が通れる程度。その道をボロ服の、真っ黒い顔の人たちがまるで夢遊病者のように南へ北へゾロゾロと続く。本町へ向かうも焼け残った家は見当らない。左折して上本町六丁目の交差点に出たとき、ハッと目に映った舗道脇の避難防空壕。その入口に横たわる抱合った母子の黒こげの死体。壕内を見るとさらに数人の性別も判らない死体。どこの誰とも判らず、さぞ苦しい思いで命を落されたと思うと余りの戦争の悲惨さに、ぐっときみ上げる憤りで胸が一杯になりました。

また京橋の陸軍造兵廠の猛爆。さらにその巻添えをくった京橋駅の惨状。罪もない女や子供までがつぎつぎと倒れて行く有様はとても筆舌には尽くせません。こんな無惨な戦争を一体誰が始めたのか？二度とあつてはならないでしょう。

ソ満国境について

I・Mさん 69歳

摂津市鳥飼八防

私は大正四年十月、摂津市鳥飼八防に生まれ同地で育った。昭和十七年三月、二十二部隊に応召、満州歩兵第一八〇部隊に転属。昭和二十二年二月、ナホトカから舞鶴港に復員した。

私の体験した終戦時のソ満国境について述べる。国境最前線に分哨（分隊、下士官長で十六名編成）、国境監視隊（小隊、将校長で三〇名編成）、その後方に守備隊（中隊または大隊）独立歩兵大隊（三〇〇名から一、〇〇〇名）で編成され、分哨は一個分隊、監視隊は部隊に一個所設置されていた。国境監視隊は大隊よりも師団の作戦参謀本部からの指示が多かった。私が勤務していた場所は東安省尚志屯で、五葉台監視隊第二十五向地視察班要員として

昭和十七年八月より終戦の昭和二十年八月十日まで、同地点にてまる三年間勤務していた。昭和二十年八月八日夜半（十一時から十二時）、ソ連軍は国境線を突破して満州領（現中国）に侵入。

まず最前線の分哨を奇襲、全員玉砕。翌朝九日午前七時、五葉台、尚志屯、二人班、鳥山陣地、兵舎を十二機の爆撃機で奇襲。突然の襲撃のため、私達は何の手だてもできない始末であった。

尚志屯守備隊より一個中隊が九日の早朝に五葉台に到着し、守備についていた時、ソ連の飛行機の爆撃に遭い、五十キログラムから百キログラム爆弾と機銃掃射のため全滅。死者・重傷者で廃墟となる。生存者四十名程度となり、私は爆撃時、参謀指揮所で望遠鏡でソ連の動向を視ていたが、この指揮所は敵の目標になっていたため、爆弾で土に埋まっていたペトン式トーチカがむき出しになった。直撃弾がなかったの

が、なによりの幸となったようである。その時私自身、絶対死ぬことはない自信ができ、洗礼を受けた気持ちになった。すぐ兵舎へ行くも、交通壕は破壊され、何人かの戦死者と負傷兵を見た。兵舎の近くに行くも兵舎なく、大きな爆弾の穴があり、その中と周辺に多数の戦死者があり、また医師、衛生兵なく重傷者多数のため健康者をもって応急の手当するも効なく、このところで戦死された氏名は府世話課に報告済である。

なお私が所属していた部隊は、適道歩兵第一八〇部隊第七中隊（中隊長白井中尉）であった。しかしこの部隊も昭和二十年三月移動している。今私が申し上げた五葉台監視隊で勤務している者は元一八〇部隊の兵士である。

以上のように何の予言もなしに惹起（じやっき）するの戦争である。明けて、十日夕刻からソ連軍は総攻撃に転じ、私達生存者は、たこ壺を掘り、手榴弾を穴の

周囲に敷き、自決すべく覚悟をしていた。誰言うことなく、後方の半載河陣地にて態勢を立て直して戦おうではないかと五葉台を撤収して半載河陣地に着いたのは十一日早朝であった。半載河には独立歩兵大隊があり、その大隊に合流して戦うことになった。その大隊と半載河―平陽鎮（ソ連戦車隊と交戦）この時すでに八月十五日―平陽―平陽山中―林口山中で山田部隊合流―林口で武装解除。この山田部隊は昭和二十年三月興凱湖で新編成された部隊で将兵三、〇〇〇名、民間人二、〇〇〇名の大世帯で、完全武装された部隊であったが、衣類と装備、弾薬があっても食糧には困っていた。山田部隊の中に一八〇部隊の徳永少尉（のち大尉に進級・第六中隊）岡本兵長（のち軍曹に進級・第七中隊）とも会った。山田部隊についてはまたの機会とし、民間人のことについて若干述べることにする。

民間人といってもほとんど開拓団の人達で婦女子と老人、子供達で食糧がなく、それこそこの世の地獄であった。民間人の人達はこの時、乳飲み子を中国人に預けた人もあった。私達もこの部隊に合流したが食糧がなかった。合流して初めて終戦になったことを知る。林口広場将校官舎前で武装解除を受けたのは、昭和二十年九月中旬であった。武装解除後もソ連の食糧も非常に悪く高粱・粟の穀の被ったものであった。全員栄養失調になってしまった。ソ連軍は私達に歩いて牡丹江まで行くように指示したが歩くことができない。車送されて黄道河子に着き、歩いて牡丹江ハイリン飛行場に到着したが、格納庫が収容所になっていた。関東軍の高級将官達も収容されていた。牡丹江の市内では食糧倉庫、軍の施設はすべて崩壊されていた。牡丹江に約十五万人の将兵がいた。ソ連軍は日本兵を一千

名編成で日本に帰す約束をしながらもシベリヤに強制抑留し、酷寒零下五十度の地にて、一年から三年、四年とソ連開発のため使役として酷使した。終戦四十年たっても忘れることはできない。二度とこのようなことの無い、平和な世界であることを祈るのみである。

銃後の和歌、俳句

T・Y 64歳

摂津市正雀本町

昭和十九年三月出征の日

千万無量思いは眉宇にありながら
笑みて征きけん常のごとくに
黒々と光り輝く眼をむけて
君は挙手せり物事はただ
大君の辺にこそ死なめと征く人を
還り来ませと祈るかなしき
大なる国の動きぞ征く人も
残るも同じ 戦の場
召されゆく夫の背にある春ひざし
わが夫も戦最中の雲の峰
大陸の基地追いつめて国の秋
慰問文書くるに蚊火を焚きそえぬ
燕の巢もとのいなり留守居無る
朝顔や郵便受けの軍事便
初秋の町によみ返すいくさの句
戦人今日も寝ぬるか星月夜

目つむれば落花の駅の旗の波

昭和二十年戦争益々苛烈となる

今日も又無事にあれよと朝床を
はなるる前に君を祈りぬ
兵の妻暑さ寒さも蔭膳に
清水かかさず還る日待つ
生還は期せねど恋したまゆらの
夢は征野の夫にかよいつ
野に山に若葉匂えどわが夫の
苦勞思えば涙わき出ず
わが夫もかく戦うやばげしかる
ニュース聞きつつ胸迫りくる
荒海の怒濤のりこゆ意気もちて
み民の道にはげめざらめや
新春を迎えて
新玉のことほぎ酒をいづくにて
交はせ給うやつわ者君は
み灯に打つ柏手よ日参の
夫が武運守りませ神々

戦地より送金ありいよいよ身辺の整理のためか？

妻の生活せめて安くと願う春の
御心かなや思えば泣かゆ
そそり立つ戸室の山も影うせて
秋雨けむる蔭膳の部屋
ラジオ言う『わが中支軍は：』の戦況を
ききのがさじと静かに坐る
ますらをの妻とし生きよ我は無き
ものと思えと今日のみ便り

終戦後

国敗れ山河けわしく秋立ちぬ
朕民と俱とぞ敗戦の秋
国敗れ飢えてゆく世も白山に
つらなる加賀の山河美し
いもづるの粥をそそりて今日もまた
敗れし征野に思果てなん
木枯らしの音を聞きつつ幾山河
夫が還りの早かれとぞ念う

春の風吹けくあまた同胞が

故国恋いてぞ待てる大陸に

海遠く敗れし征野に船待てる

君恋いてこそ千々に砕けん

我一人縁むすびし三年目の

弥生半ばに君一人恋し

折りつつ縫う衣なり

君還り来て着ます日のあれと

陽春も尚降りしきる雪国の

いまだ還らぬ人の待たるる

二人の息子未帰還のまま心労の為^{しゅうと}舅上

病没される

神々よこの舅あわれと思召せ

息子すべてを征野に送りにて

やつれゆく舅の願いよ叶いませ

この世の別れに一目なりとも

昭和二十一年五月十日復員す

この姿見せたき人はすでに亡し

夢ぞもと再度つねれどまことなり

今日のよろこび何にたとえん

つつがなく還り来ませし夫が寢息

三年めに聞きぬ青葉の部屋に

還り来し兵士の前に弾丸ならぬ

桜の花のほほえみて舞う

“至烈部隊歌”を作詩し戦友に託す

無事復員出来るか否かを案じて

部隊歌を戦友に託して八日後に

還りて唄う感激いかに

この喜永遠に忘れじつつましく

苦難の道も耐えんとぞ思う

至烈部隊歌―中支にて―

T・Rさん 71歳

撰津市正雀本町

烈々燃ゆる闘魂を

戒衣につつむ勇夫が

莞爾と笑めば支那の子が

来りて唄うなごやかさ

支那の民安らけく

豊かな稲穂なびきけり

あゝ!!

愛民の “至烈部隊”

湖南の山に春が来て

湖上の水ぬるむ時

将兵集う丘の上

軍歌よとどけ国迄も

そよ風匂う桃の花

武人の心誰か知る

あゝ!!ゆかしけれ

“至烈部隊”

捕虜の一日

K・Sさん 67歳

摂津市正雀本町

シベリヤの冬は夜明けが遅い。

暗闇の中から「起床」と不寝番の声。

つづいて「飯上げ」と炊事から声がかかる。

朝飯と言っても、大豆と豌豆のスープのようなものである。

朝飯が終わり、燕麦でつくった黒パンを三〇〇グラムもらうと「作業整列」の声がかかる。

アムール五十人、シャワー五十人、……五十人……三十人、最後に水道一〇〇人と整列し終ると、前と後に警備兵がついて、ラーゲル（収容所）をあとに作業場に向かう。作業場に着く頃にやっと明るくなった。

八時になると「作業開始」のカマン

ジール（引率将校）の号令で、凍り付いてコンクリートのようにかたい地面を、金棒のようなもので穴を掘るのが、一日のラポート（仕事）である。

水道管を通す穴だと言うことだが、一年の半分を冬で過ごすシベリヤでは、地下四メートルまで掘り下げないと凍ってしまふ。

深さ四メートル、幅一・五メートルの穴を掘るのは楽なラポートではない。

「ヤポンスキー、ソルダート、イビヨナマーチ（日本の兵隊は働きがにぶい）」とナチャニツク（現場監督）の声。

やつと十二時が来て一時間の休憩。ドラム缶でつくった、お粗末な薪ストーブの休憩所は一度に百人が入れない。二十分ぐらいづつ三交替で暖をとりながら、朝もらった黒パンを食べる。二十分が過ぎると名残り惜しいがまた寒い屋外へ。

一時になると作業再開。地獄の鬼でもあるまいに金棒で穴掘りがはじまる。もう何時かなあー、そろそろ暗くなりはじめたから四時頃だろうか、あと一時間程やなあー、と思いながら、コンツンと金棒を動かす。「作業終了」の号令で、やれやれ五時が来たと、大いそぎで金棒をかたづけける。

もう暗くなった道路を、警備兵に引率されて、疲れた足をひきづりながらラーゲルへかえり、大豆と豌豆のスープのような夕食を、電灯もない暗い二段座敷のようなところで食べる。

七時になると点呼、また寒い屋外に出ねばならぬと思うといやになる。ソ連兵が勘定しやすいように十人づつの列をつくる。アジン、ドアー、ツリー、シチリー、ペアッチ……、と納得のゆくまで何回でも勘定をしなおす。

「点呼カンチャイ（終り）」の声でやれやれと思うと、「戦友」を五分開

歌ってくれ」今度はソ連兵の要望である。「ここはお国の何百里」ソ連軍に追われて逃げる途中で倒れた戦友を偲びながら歌う。倒れた戦友はどうなっただろうか。追われて逃げるのが精一杯で、どうしようもなく放つて来た戦友を偲び、ソ連兵は歌詞はわからないが、何んとなくしんみりとした曲に耳を傾けるのであった。

真つ暗な舎内に入ると、もう何もすることはなかった。一人に一枚の毛布（二枚以上持っていた者は強制的に取り上げられた）にくるまって寝るのだったが、真つ暗な中でただ一つの楽しみは、捕虜仲間に南條文若（現、三波春夫）がいて、毎晩のように浪花節を聞かせてくれたことである。本人のネタが切れると、米若や虎造の物まねで楽しませてくれた。米若の佐渡情話はなつかしいなあーと聞きながら、いつの間にか眠っていた。

一日八時間のレポートにも例外があった。それは夜間作業である。ハバロフスクの駅に貨物列車が着くと、定められた時間内に積んだ荷物をおろしてしまわなければならない。

点呼がすんでやれやれと、くつろいでいると「夜間作業がある。今から名前を呼ばれた者は集合」との声。

「○○○○」「△△△△」「××××」

「K」と呼ばれてしまった。つらいけれども、どうしようもない。舎外に整列すると警備兵が前後について貨物駅へ。暗闇の中に貨物列車が止まっている。「ストイ」（止まれ）とナチャニツクの声で止まる。貨車の扉を開けると麻袋が積んであるのが微かに見える。ソ連人が板を二枚運んで来て貨物にかける。「○○時までにおろしてしまえ」と再びナチャニツクの声。

電灯（照明）の設備もない暗い中で、一列に並んで荷おろしはじまる。貨

車に積んである麻袋の中味は麦のようである。一人づつ麻袋をかついで貨車にかけた二枚の板に、上り下りするのだが、四十五キロの身体に四十キロはあるだろうと思われる麻袋をかつぐのは重労働であった。だが倒れるまで続けなければならない。何回か荷おろしを続けているうちに、ついに力が尽き、麻袋をかついだままレールの上に落ちてた。いやと言うほど膝と肩を打って立てない。引率の将校がとんで来て「大丈夫か、お前の身体では少々無理だ。暗いところで休んでおれ」と言われる通りに、貨車の蔭に座っていたが、作業が終る頃にナチャニツクに見つかってしまった。「ダバイ（早く作業しろ）」と言うのだが足が痛くてどうにもならないので、将校を呼ぶと「見つかってしもたら仕方がないから、おれがぶん殴る格好をするから、そこに倒れろ」と言われる通りに、ぶん殴ら

れて倒れると、「ニーザ、ニナーザ（その必要はない）」ソ連ではなぐることは、法で禁止されていたからでもあるが、程なく作業も終わり足をひきずりながらラーゲルへ帰ったが、あれから四十年近くも経た現在、後遺症となつて足をひきづりながら、電気治療に通わねばならないとは……。

戦争から平和へ！

私の体験三話と平和感謝合掌の今

Y・Hさん 76歳

摂津市千里丘東

一、進攻―支那事変参戦記

昭和十三年大阪第百四師団の動員により、陸軍歩兵少尉として召集を受け、歩兵第百八連隊の小隊長に任ぜられ、満州における酷暑地の実戦的訓練と対ソ連張鼓峯事件に参戦。終結のあと南支派遣軍の序列に入り大連より南下、バイアス湾の塩灶背に上陸し、広東攻略のため酷暑と豪雨の中を完全軍装の重さに耐えて淡水、惠州、増城、石橋壩を進攻し、十一月二日広東市に入城した。そして休む間もなく我第三大隊は北進し蕭岡、南村地区に進出、掃蕩を続行し警戒任務についた。そして広東周の宜撫治安回復に専念したものである。

その後、師団は重慶軍が全線にわたる総反撃の指令を発したとの情報に基づき、花県平地に向け攻撃開始、大いに戦果を昂揚した。

爾後、三水地区に移駐し第一線警備についた時、敵軍の四月攻勢に遭遇した我第三大隊は西江左岸の馬口、九水岡の激戦で、戦死者中隊長以下二十名、戦傷者三十二名の損害を受けたが、果敢なる攻撃を続行し敵の反撃を阻止、大いに戦果を得た。昭和十四年六月、三水より我大隊は広東北方の兵工廠に移駐し、また八月に蜂湖に移動、敵の来襲を撃退して警備任務についた。

その頃陸軍歩兵中尉に昇進する。かくして同年十一月、翁英作戦に突入。わが連隊は南山支隊の主幹部隊として粵漢線に沿い北上し上南坳に進出。敵百五十二師団と交戦しこれを撃退。続いて伯公坳高地に陣地構築し敵の大軍の執拗な攻撃を阻止。激戦の末、大損

害を与えて撃退し、なお浥江の渡河を敢行して英徳に進攻。十二月三十日、英徳県城に突入占領して軍の目標は達されたが、南寧作戦の激況悪化に伴い、十五年一月一日を期して反転しこの大作戦は完結。西山支隊は軍司令官より感謝状を授与された。

そして再度兵工廠に移駐。その間五月の良口会戦に、十六年九月の四邑作戦に参加のあと師団の将校第一回の召集解除により、十二月八日の太平洋戦争宣戦布告を帰還船中にて聞き、十七年一月、故国日本の土を踏み進攻の記は終わる。

二、防禦―迎撃陣地構築談

復員以来銃後にありて、二カ年半余の昭和十九年十月、再度召集を受け高槻工兵隊に入隊。歩兵、砲兵将校五十名が工兵将校に転科のための教育を二カ月間受け、その内五名が部隊に残留

を命ぜられ中隊長として二十年一月より自宅から通勤して職務に励行のさ中、師団命令に依り高槻工兵隊より作業指揮部隊を編成し、その隊長として和歌山県御坊市東南吉田村に駐留した。

在阪各部隊より派遣された作業部隊計約五百名を指揮し、南方海上より攻撃し来たる敵軍の上陸を阻止殲滅する目的を以て、三十糎加農砲の陣地構築に着手。各部隊将兵の精励の末、三月末を以て完成し各部隊は原隊に復帰し、わが工兵部隊は引続いて大阪府の南端の孝子村に移駐し高射砲部隊と協力、海岸山腹に二十五糎榴弾砲の格納庫を構築し、大阪湾を北進する敵軍を潰滅する目的を以て、鋭意作業を続行、五月末これを完了。その間榴弾砲搬入のため「山口橋」「藤橋」「松橋」の三橋を架設したのを懐い出してこの項は終わり、次の被爆話に移ろう。

三、被爆―まぼろしの広島架橋話

孝子峠の砲陣地完了直後、すなわち昭和二十年六月、第二百二十五師団編成命令に依り高槻工兵隊に於て新たに将兵を召集され、新設工兵大隊の第一中隊長に任命され編成業務を完了し、部隊は兵庫県竜野に駐留し教育訓練を実施。その間私は千葉工兵学校に於て一カ月間工兵中隊長として教育を受け、竜野在の部隊に復帰し教育訓練に任務精励中、八月六日の広島原爆投下の日を迎えた。

そして八日師団命令によりわが部隊は本部および第三中隊を残し、第一中隊および第二中隊を併せ指揮し山口部隊として現地広島警備司令官の指揮下に入るべしとの命により姫路駅を出発。十日朝、破壊された広島駅に到着。途中道路脇の仮天幕の中の被爆の方の痛ましい姿をかいま見ながら現在の平和記念公園に至り、警備司令官に申告し

下記命令を受ける。「作業部隊は被爆により焼失せる天満川の上流より広瀬橋、緑大橋、新観音橋を、引継ぎ太田川の上流より相生橋、西平和大橋、新住吉橋の架設作業を命ず」この命を受け直ちに第一中隊に天満川の架橋に、第二中隊を太田川の架橋にと分担を決め、また各中隊毎に架設班、材料班、機器班とに編成し、各中隊各班毎にその任務に就かしめる。材料班は当時各河川に繋留してあった丸太材の検分仕わけに、機器班は近郊町村に製材機、杭打機、巻上ウインチ、測量器具等の借入に、そして架設班をしてそれぞれ現地の測量丁張に着手、そして鋭意作業続行中、十五日急拠隊長集合の命を受け、馳せ参じたところ司令官より予想もしない「天皇陛下の玉音」を拝受し日本の終戦を知る。

帰隊のうえ、部隊全員にこれを伝え部隊は架橋任務を解かれ現地間との残

務整理を完了し、原駐地竜野へ帰隊した。
直ちに召集解除となり下士官兵を故郷
に帰し、部隊の整理を終了し故郷摂津
市（現在）に帰り、まぼろしの広島架
橋話は終了する。

平和―感謝、合掌の今

明治に生まれて大正の世に学び昭和
初期の参戦、そして昭和二十年被爆終
戦から平和へとわが国未曾有の一大転
機を体験した私は、二次被爆者として
摂津市原爆被害者福祉協議会の一員と
して「核戦争起すな」「核兵器なくせ」
を主目標に、また、ノーモアヒロシマ、
ノーモアナガサキをモットーにして平
和推進運動の一端を担いつつ、終戦四十
周年、この平和な現代に生きる幸せに
感謝し、全世界全人類の永遠の平和を
祈念し、大陸で散った多くの戦友と被
爆死された人びとの冥福を祈りながら、
余生を送っております。

早春譜

I・Kさん 79歳

摂津市新在家

晩秋の昭和十六年十二月一日、呉海兵団に入団せよとの赤紙が届いたのは召集の三日程前だと思う。

巷は戦争の渦に巻きこまれて、今日も征く幾人かの若人等が別離の悲しみを超えて、緊張と昂奮の裡に孤村は昏れて行く。

江田島兵学校に配属されて練習艦に乗り組み、士官候補生の実習指導訓練にあたった。

近海は機雷敷設で航路は塞がれて危険極まりなく、内海での訓練に忙殺されていた。

突如、沸きあがる歓声が軍艦マーチの曲に乗って「大本営発表、我が帝国海軍は本日未明、敵の真珠湾を攻撃し、〇〇艦△隻爆破の戦果を収めたり。

万歳」と何回となく繰返され、敵の狼狽ぶりも愉快なまでに報道されていた。

翌日が十二月八日宣戦布告の日である。

寝首を掻いたような戦果ではあつたけれど将兵の欣喜雀躍は言うまでもない。

その後のミッドウェイ作戦や戦績は発表されずに終わった感じである。

世界に誇る戦艦大和や武蔵、航空母艦赤城の艦隊集結が事前に発覚されて敗戦の憂目に遇い、あたら大きな財が海の藻屑と消え去ったと聞いている。探知機情報の劣等によるものだと言われていた。

戦線急を告げて横須賀工機学校へ入学を命ぜられ敵前上陸艇の「エンジン」の解体から組立、調整、操作の一切を僅か二カ月で修得させられた。生地獄さながらの訓練には閉口した。機関長として機雷敷設に、上陸訓練に、将来は大きな戦果を、と夢見たものである。

百夢の海なまぐさく陽炎える

軍刀一振りをおし頂いて勇躍陸戦部隊に参加し、九州宮崎で戦闘機の格納庫増設作業に汗を流し、事故の発生に涙した記憶は今もなお残っている。同胞の一人が砕岩機の操作を誤り自爆したことである。徹夜で火葬を行い納骨を済ませ、遠くわざわざ大阪から英霊の遺骨を引きとりに来られ、涙で渡したのであるが、若き未亡人が亡き主人を抱いて去り行く姿を見送った黄昏れ径……

遺骨去る 倅淡く時雨けり

如月の香港への征途は大変だった。逆巻く怒濤の玄海灘で何回か沈没の憂目にあつた恐怖や、船内でシラミの温床になった着衣には、人に語りつくせない苦労があつた。

そこかしこに起きる銃撃戦や、九竜の裏山から「ゲリラ」の撃退戦も大戦という怪物の一駒かもしれない。

木製の飛行機を二、三機据えて敵機に備えた。祖国の軍備に終末の感を深くしたことは申し上げるまでもない。

木飛機は貌で国守る花野かな

悠々と飛爆する敵機を尻目に壕への駆足が日夜つづいた。

飛機去つて安き心や夏の月

捕虜の身となり工場等に使役として差し回され、ある時は銃剣で尻を突かれたり、血ぬれた足を引きずって戻ってきた者もあった。食糧不足での労働は動作に鈍りは出たかも知れないが、敵愾心が日毎に募ったことはない。

囚屋のともしび淡し秋の風

以上、五カ年有余の体験の一頁に過ぎないが、一体、戦争は何をもたらし、戦争から何を得たのかと思う。ただ、心の奥にあるものは、折角の平和な家庭が破壊され、罪のない幼児まで飢餓の苦しみを味わいなめた戦い。針小棒大に誇大の戦果発表で将兵を酔わしめた欺きや、巨額な財を海の藻屑と葬り去った愚かな戦いの損失、捕虜の身の屈辱の日々を堪え忍んだ同胞の苦しみなど、走馬灯のように脳裡を駆け巡るけれど、戦争によって得たものは何一つとして見当らない。

戦争は犯罪を作った怪物でしかないのだ。帰郷して、発心思い立ったのは自分のこれからの歩く道、筆にするまでもないが、先ず平和であり、新しい

明るい町づくり、住みよい町を作ることにあった。

このために微力ながら住民各位のお力添えを得て、村政に、市政に、社会福祉に参画し、老軀に鞭打ちながら平和を願って今日まで来たのである。余命幾ばくもないが市政の発展、住民福祉のため命のある限り尽したく考えている。摂津市の平和宣言の輪が、日本の平和の輪となり、世界の平和の輪となることを心より祈念しております。

早春の彩急く庭の梢かな

早春譜奏でる樹々の陽に眩し